

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.13 (2013年8月号) ◆

残暑お見舞い申し上げます。猛暑の折、皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。次の14号の投稿原稿は、9月末が締切です。皆様の優れた論考をお待ちしております。このニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> とあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【20世紀メディア研究所主催：第78回20世紀メディア研究会：国際シンポジウム「日本と東アジアにおける検閲史再考」】(7月20-21日午後1時・5時半)
“Reconsidering Censorship History in Japan and East Asia”

◆ 7月20日(土) 第一部 戦前及び戦中期の検閲：司会は浅岡邦雄氏。

・安野一之「昭和初期の出版検閲—内務省と出版者の相克—」：警保局を中心とした検閲側の動きを軸に、出版者側によって組織だった抗議が行われたことに対して、どのような対応が行われたのかを、詳細に検討した。

・ジョナサン・エイブル「パブリックとプライベートの境界—戦前日本におけるキス表象の多義性—」：具体例を画像で示しながら、戦前の日本で発禁の対象になっていたと言われるキス、接吻のシーンについて、検閲の幅やその多様な意味を分析した。

・高榮蘭「移動する検閲帝国と拡散する朝鮮／語—『戦旗』『文芸戦線』『改造』『中央公論』の流通網から—」：1920年代後半を中心に社会主義に関する書籍が日本と朝鮮でブームとなる中で、出版警察側の増強と左翼側の対抗が出版流通網をめぐってどう展開したかを豊富な資料を用いて論じた。

・河原功「日本統治期台湾での「検閲」状況」：台湾における検閲の実態や法令などを示す資料に基づき、秘匿性の高い台湾での検閲の解明に向けた全体像を語った。

■第一部では、水沢不二夫氏がコメンテーターとして議論を展開した。

◆ 7月21日(日) 第二部 占領期及び戦後の検閲：司会は土屋礼子。

・中野正昭「占領期の軽演劇検閲—舞台娯楽にみる敗戦／終戦」：古河ロッパ座、ムーラン・ルージュ新宿座、および地方の軽演劇とその台本検閲の問題を論じた。

・山本武利「多重的ブラック化装置の中の占領期検閲」：出版したばかりの自著『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』に基づき、GHQの検閲体制を、CCDによる通信検閲と諜報との関係を中心に述べた。

・小林聡明「韓国における通信検閲体制の歴史的展開：植民地支配・占領・独裁をこえて」：近代日本で開始された通信検閲体制が、植民地支配の開始にともなって朝鮮に移入された。それは米軍政期、軍事独裁政権下の韓国にも引き継がれたことを明らかにしながら、植民地支配と占領、軍事独裁の意味を論じた。

・何義麟「戦後台湾における検閲体制の確立」：植民地統治から解放された台湾で、メディアに使用する言語の選択（日本語か中国語か）といった問題が生じたこと、また1949年の戒厳令による厳しい検閲制度の展開とそのダメージを論じた。

■第二部では、梅森直之氏がコメンテーターとして議論を展開した。

※なお、研究会当日に配布された予稿集に納められた各報告は、次号の『Intelligence』に掲載予定のため、今回は会員ホームページにアップしません。ご了承下さい。

●次回の20世紀メディア研究会は、10月5日(土)で、華京碩さん、島田大輔さん、中野綾子さんがご報告の予定です。その後は、11月9日(土)、12月7日(土)を予定しております。なお、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【今月のコラム・山東大学で考えたこと】

今夏、山東大学に滞在する機会を得た。山東大学は省都・済南と山東半島の先にある威海の二つのキャンパスを有する中国屈指の名門大学の一つである。今回、私が滞在した山東大学・韓国学院は、威海キャンパスに位置している。威海キャンパスの「売り」のひとつは、なんといっても朝鮮半島研究である。山東と朝鮮半島は、地理的に近接しているだけでなく、歴史的にも文化的にも関係が深い。韓国華僑のルーツは、大部分が山東省にあり、いまや韓国の代表的大衆料理となった「じゃじゃんみょん」(ジャージャー麵)は、山東料理に端を発している。山東大学は、地理的、歴史的、文化的な関係性を踏まえ、1992

年の韓中修好いらい、中国における朝鮮半島研究の拠点にならんとしている。

だが、朝鮮半島について学んでいる学生たちと接してみて、驚いたことがあった。第一に、日本の朝鮮植民地支配について、ほとんど知らないことである。韓国併合や3・1独立運動などについての知識はあるが、植民地朝鮮で何が行われたのか、そして、朝鮮植民地化の過程に対する中国の関わりの部分については、ほとんど知らなかったのである。東アジア国際関係の観点から、20世紀前半のアジアの歴史をとらえることは、日本や韓国だけでなく、今後、中国でも大きな課題となってくるかもしれない。

第二に、北朝鮮の歴史に対する知識の不足である。これは中国の朝鮮半島研究者が、実質的には「韓国」研究者であることと大いに関係する。中国の人々が、同じ東側陣営であった北朝鮮に対して、あまり理解できていないことに驚いた。だが、それは、同じ陣営であるがゆえの「微妙な問題」として、北朝鮮に関する研究や教育が、十分に行われず、いまなお「微妙な問題」であり続けているがゆえのことであろう。

ぎゃくに中国人学生の特定の歴史に対する知識に驚かされたこともあった。近著『原子力と冷戦』加藤哲郎、井川充雄編)のなかで、私は南北朝鮮の核開発について論じ、中国の核実験にも言及していた。1964年が、中国の核開発における一つのメルクマールになっていることを理解していた。そこで、私は北朝鮮の核開発と関連し、学生たちに中国の核実験成功の時期を尋ねてみることにした。これに対して、学生たちは、いっせいに1964年10月と即答した。続けて、ある学生は、こう答えた。

「それは、かならず入学試験に出ます。それを知らなければ、山東大学に入れません。」

朝鮮植民地や北朝鮮の歴史については知らなくても、自国の核開発史は十分に知っている。自国の歴史のどこに重点を置いているのかについて、まざまざと思い知らされた。もちろん、歴史教育においては、自国の観点が重視されるのは言うまでもない。だが、このことは中国にとっての隣国である韓国や北朝鮮の歴史(観)を知らなくてもよいということを意味しない。むしろ、これは中国だけの問題ではない。世界のいたるところで見られるグローバルな問題でもある。

[8月14日付文責：小林聡明]